

## 魔法のこんぺいとう

県立大島高等学校 2年 木村 舞

あるところに、とても気が弱くて、泣き虫な一匹のこぶたがいました。そのこぶたの名前は「たろう」といいます。

たろうは何か困ったことがあるとすぐ、大好きなおばあちゃんの所へ行きました。昔はよく遊んでくれたおばあちゃんでしたが、もう年をすごくとってしまい、布団の中で静かに過ごすことが多くなっていました。

ある日たろうは、友達と一緒に野原で野球をして遊んでいました。すると、友達の打ったボールがヒューンと大きく飛んでいきました。たろうがボールを拾いに行くと、何とそこにはハチの巣が……。運悪く飛んでいったボールは、みごとそのハチの巣に当たっていたのです。たろうは、あっという間に、怒ったハチにさされてしまいました。

「えーん、痛いよ、痛いよ。」

たろうは大泣きで、おばあちゃんのところへ行きました。

「おやおや、どうしたんだい」

とおばあちゃんは優しくたろうに聞きました。

「えーん、ハチにさされちゃったんだ。」

おばあちゃんはそう聞いてから、一つのビンをすつと棚から取り出しました。その中には、きらきら光る、まるで宝石のようなきれいなこんぺいとうがたくさん入っていました。おばあちゃんは、そこから赤いこんぺいとうを一つ取ると、わあわあ泣いて大きく開いているたろうの口の中へ、ぽんっと入れました。たろうが口を閉じると、あまあいこんぺいとうが口いっぱいになりました。たろうの涙もぴたっととまりました。

「赤いこんぺいとうはね、何も痛くなくなる魔法がかかっているんだよ。」

とおばあちゃんはたろうの頭をなでながら言いました。たろうはありがとうのかわりに、にこっとして帰って行きました。

また何日かすると、たろうが大泣きでおばあちゃんの所へやってきました。

「おやおや、どうしたんだい。」

とおばあちゃんが聞くと、

「エーン、運動会のかけっこで最後になっちゃったんだ。もっと足が速くなりたい。」

と言いました。すると、おばあちゃんはまたビンを取り出し、今度はたろうの口に黄色のこんぺいとうを入れてあげました。またこんぺいとうの甘さといっしょにたろうは泣きやみました。

「黄色いこんぺいとうはね、足が速くなる魔法がかかっているんだよ。」

おばあちゃんはまた、たろうの頭をなでながらそう言いました。たろうも同じように、にこっと、笑顔で帰って行きました。

その後もたろうは、テストで悪い点数をとってしまったとか、お母さんがお出かけするから、一人でお留守番をしなければいけない、テレビで見たお化けが恐くて眠れないと言っては、泣きながらおばあちゃんの所にきました。そのたびに、おばあちゃんは優しくたろうの口の中へこんぺいとうを入れてあげました。

「青いこんぺいとうは、頭がよくなる魔法。」

「オレンジ色のこんぺいとうは、さみしくなくなる魔法。」

「ピンクのこんぺいとうは、怖いものなんてなくなる魔法。」

そう言っでは、たろうの頭をポンッポンッとなでてくれました。

たろうが何度もおばあちゃんの所へ行く間に、とうとうビンの中のきらきら光るこんぺいとうは、残り一つとなってしまいました。

ある日たろうは、おばあちゃんの所へ遊びに行きました。しかし、その日のおばあちゃんは元気がなく疲れているように見えました。

元気がないおばあちゃんを見て、たろうはなぜか涙がぼろっとこぼれました。

そんなたろうの涙を見て、おばあちゃんはビンから最後のこんぺいとうをたろうに渡しました。そしてこう言いました。

「強い子になるんだよ。泣いてばかりじゃだめ、頑張りなさい。約束だよ。」

「最後のそのこんぺいとうは、大事な約束が守れる魔法がかかっているんだよ。」

そう言うとおばあちゃんは、たろうの頭をなでることもせず、目を閉じました。

おばあちゃんは遠い遠い空の上へ行ってしまいました。

たろうは急いで、最後のこんぺいとうを食べ、ぐっと涙をこらえました。

その夜、たろうは夜空を眺めて、おばあちゃんとの約束を思い出していました。

空には、おばあちゃんのように優しく光るお月さまとこんぺいとうのようにきらきら輝くたくさんのお星さまがありました。

